

# 日本におけるウォーター・ポロ(水球)の伝播と普及に関する研究

高木英樹・真田 久

## A historical study about the introduction and diffusion of water polo in Japan

TAKAGI Hideki and SANADA Hisashi

### 1. はじめに

競技としてのウォーター・ポロ(水球)は、イングランドのメトロポリタン水泳協会(Metropolitan Swimming Association)が<sup>8)</sup>、1870年に水中フットボール(Football in the water)の名称でルールを制定したのが起源とされる<sup>1)</sup>。その後1888年、アマチュア水泳連盟(Amateur Swimming Association)によって、ほぼ現行と同様のウォーター・ポロ・ルールが策定され、イングランドおよびスコットランドにおいてウォーター・ポロが盛んに行われるようになった。さらに1892年には英国<sup>注1)</sup>における統一ルールが制定され、イングランド対スコットランドの国際試合が行われるなど、競技としてのウォーター・ポロがさらに洗練されていく。

その後ウォーター・ポロは、英国国内に留まらず、英国と係わり合いの深い人物を介して、新大陸やヨーロッパ大陸にも伝播していった。例えば米国(United States of America)にはイングランド人のジョン・ロビンソン<sup>注2)</sup>によって1888年に紹介された。数年遅れて、ロンドンでウォーター・ポロを学んだドイツ人のフリッツ・クニーゼ<sup>注3)</sup>が1894年に祖国でウォーター・ポロを広め、1895年にはドーバー海峡を隔てて、英国の隣国であるベルギーにもウォーター・ポロが紹介されている。またハンガリーでは、英国の雑誌を見てウォーター・ポロに興味を持ったフゼーレッシ・アルパド<sup>注4)</sup>がウォーター・ポロのルールブックとボールをハンガリーに導入し、1899年に初めてハンガリーでウォーター・ポロの試合が行われた。

このように1870年代から1890年代末にかけて、ウォーター・ポロは英国を発祥の地として米国や

ヨーロッパ各国に伝播し、各国の事情に合わせたルールの現地化を経て発展していった<sup>2)</sup>。

そして米国やヨーロッパ各国にやや遅れるが、1907(明治40)年には日本にもウォーター・ポロが導入されていたようで、旧制第一高等学校水泳部の学生がウォーター・ポロに興じたとの記録がある<sup>3)</sup>。しかしながら当時の様子を示す詳細な資料は見当たらず、ウォーター・ポロ競技に精通した者が居たかどうか不明である。その後、1915(大正4)年に慶応義塾の学生と横浜外人の間で国内初のウォーター・ポロ国際試合が行われた<sup>4)</sup>。この試合以降、日本国内でのウォーター・ポロに対する関心が徐々に高まり、それから10年を経た1925(大正14)年には日本選手権にウォーター・ポロ競技が導入され、水泳競技の一種目としてウォーター・ポロの存在が認められることになる。さらに1932(昭和7)年には念願のオリンピック出場を果たし、国際舞台にデビューする事になる。このように日本におけるウォーター・ポロ(水球)は、導入後比較的順調に発展を遂げたかに見えるが、その過程を記す断片的な記録は残っているものの、日本国内におけるウォーター・ポロ(水球)の普及・発展過程に関する報告は僅かに散見される<sup>5)</sup>のみで、詳しい経緯は明らかにされていない。

そこで、本研究では1900年代初頭に日本にウォーター・ポロが導入されて以降、ロスアンゼルス・オリンピック(1932年)に出場するまでの期間を対象とし、当時の水泳に関する定期刊物や水泳活動団体の活動報告などを手がかりに、日本においてウォーター・ポロ(水球)がどのように普及・発展したのかを当時の社会情勢やルールの

変更と関連させて明らかにする事を目的とする。その際に、ウォーター・ポロと関連する日本の伝統的な打球戯を海浜で定期的に行っていた事も明らかにしたい。

## 2. 和製ウォーター・ポロ

英国発祥のウォーター・ポロが日本に伝わる以前から、我国においては、ウォーター・ポロと類似した水中球技が行われていたようである。その例として、「打球戯(投球戯)」や「西瓜取り(水瓜取)」をあげることができる。

1898(明治31)年、嘉納治五郎は、嘉納塾など自身の私塾を統合して造士会を結成したが、水術の練習にも力を入れ、夏に水泳場を開設した。ここでは水術訓練の一環として日本泳法の修得や、打球戯を実施している。造士会の機関誌『國士』によれば、「本会は去る(明治32年)七月二十五日より八月二十一日に至る四週間、相州三浦郡松輪に游泳場を設け、(中略)全員を紅白両組に分ち、水中に打球戯を催ふして、遊戯中に技術を修得せしめ」<sup>6)</sup>とある。さらに後年の『國士』においても「游泳術の応用游泳中、最も興味あるものを打球戯となす。第一游泳部に於ては、(明治34年)八月十五日同二十日前後二回、此戯を催ふせしが、後者は当日風波高く、水温極て低かりしを以て、僅かに一回の勝負ありしに過ぎず。此際の勝者は白組なりき。」<sup>7)</sup>と盛んに「打球戯」を行っていた事がうかがえる。その他、東京高等師範学校(東京高師)の校友会誌においても「(明治39年)八月二十二日。快晴。鳥の翼を抜けたらん如き浪のひたひたと面を打つは快きものにあらず。午前水上打球戯。敵を沈めて喜ぶもあり、敵球を遠くへ投げて快しとするあり。獐猛なる神江君に熊の如き爪にて引き搔かれて怒るあり、右へ左へ、上へ下へと力のかぎりはね廻り息を切りてあへぐなどとりどりに面白し。」<sup>8)</sup>との記述があり、明治30年代には遊戯を兼ねた水術訓練の一環として「打球戯」が盛んに取り入れられていた事が分かる。「打球戯」の具体的な競技方法に関しては、『大日本游泳術』<sup>9)</sup>に詳しいルールが記されている。競技運営の概要を説明すると、まず競技参加者を紅白の2チームに分け、水面上に紅白同数の小玉を浮かべる。競技者は、自チームと同じ色の球を取り、船上に設置されたゴール(球門)めがけて投入する。チームカラーと同じ小玉を総てゴールに

投げ入れたチームに対しては、新たにチームカラーと同じ大玉(揚玉)が審判から水中に投入される。大玉の投入後は、チーム一丸となってその大玉を確保し、船まで運び、船の脇に設置された別のゴール(球蔵)に先に入れたチームが勝ちとなる(図1参照)。反則としては、敵の玉を区域外に放り投げたり、敵の玉を持っていない者を沈めることとなっている。裏返せば敵の球を持っている場合にはアタックが可能で、玉を奪い返すために沈めたりすることは認められていたようである。また競技者の能力に合わせて役割分担も考慮され、投球能力に優れた者はゴールへのシュート、浮力に優れた者はシュート役の防御と敵のシュート妨害、潜水能力に優れた者は玉の運搬、そして少し泳力の劣る者は遠くに散らばった玉の集め役とポジションごとの役割が決まっていた。

この「打球戯」は、もともと陸上で馬に乗って行っていた「打毬」<sup>10)</sup>が転じて、水中で行われるようになったものと思われる。馬に乗って行う「騎馬打毬」は、紀元前5世紀から6世紀にかけてペルシャで発祥し、その後シルクロードを通して中国にも伝播した。そして7世紀から8世紀にかけて遣唐使を通して「蹴鞠」と共に日本にも移入された。平安時代になると武士の台頭と共に馬術が発達すると、「騎馬打毬」は武士階級の娯楽競技として盛んに実施されるようになった<sup>10)</sup>。「騎馬打毬」のルールは、「打球戯」と同様に、まず競技者を紅白の2つの陣営に分け(各チーム4騎から10騎ずつ)、騎馬の2倍にあたる紅白の平玉を競技場内にばら撒く。騎手は、先端に網がついた毬杖(長さ約2.3m)を用いて自陣と同じ色の平毬をすくい上げ、ゴール(毬門)に投入する。一方のチームが総ての平毬をゴールに投入したら、審判が同色の揚毬を投入し、それを敵陣より早くゴールした方が勝ちとなる<sup>11)</sup>。以上は宮内省で定められた「騎馬打毬」のルールで、これと造士会や東京高等師範学校で行われていた水上での「打球戯」は、共通している。

「騎馬打毬」のルールから推察すると、造士会の水術訓練として行われた「打球戯」は、陸上で行われていた「打毬」をルーツとし、それとほぼ同一のルールを用いて行われていたことは明らかである。これは、造士会会長の嘉納治五郎が、日本の伝統的な武術を熟知していたので、水術訓練においても、このような「騎馬打毬」を応用展開したであろうことは十分推測できる。実際に嘉納は、こ

こで行われた水術を「造士会水術」と名づけるなど、水術の展開には非常に熱心だったのである。

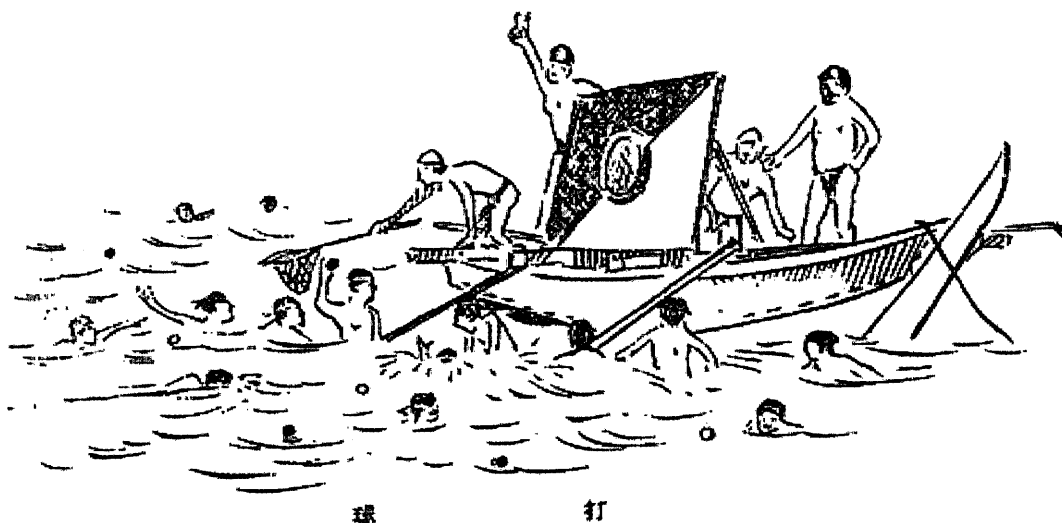
造士会水術では、日本泳法の修得や遠泳のみならず、遊戯の実施や大会の開催など、さまざまなプログラムを取り入れて行われたのであった。

造士会の水泳場で行われた「打球戯」と1870年代の英国における「初期ウォーター・ Polo」のルールとを比較すると、相違点とともに共通点も見いだすことができる。「打球戯」において「初めにたくさんの小玉をゴールに投げ入れる」というルールはウォーター・ Poloとは異なるが、大玉が投入された後は、その玉を巡って両チームのメンバーが水中で争奪戦を繰り広げ、最終的にゴールに入れたら勝ちとなる点は、英国における「初期ウォーター・ Polo」<sup>註6)</sup>に類似している。したがって、外来のウォーター・ Poloが紹介された時に、「打球戯」に慣れ親しんでいた者にとっては、洋式打球戯と受け止め、ウォーター・ Poloのルールに、比較的容易に適応できたものと推察される。また、ウォーター・ Poloで要求される泳ぎ方は、伸し泳(扇足)や立泳ぎなどという、造士会水術で重要視されていた泳ぎと同じものであったことから、容易にウォーター・ Poloを受け入れて実践できたものと思われる。

「打球戯」の他にもウォーター・ Poloに類似した水中遊戯として、「西瓜取り(水瓜取とも表記される)」もよく行われていた。東京高師の校友会誌によれば「(明治38年)八月二十八日(晴)游泳大会を催す。

東京より嘉納会長、那珂坪井両教授来られぬ。(中略)飛込、拔手雁行、遊戯、競泳、龍戦、宝探り、西瓜取り、と滞りなく日常の技術を発揮せり。」<sup>12)</sup>と臨海実習における様々な活動のひとつとして「西瓜取り」を行っていた。「西瓜取り」とは、海中で二手に分かれて西瓜を奪い合い、西瓜を相手陣地となる筏の上に置いた方が勝ちというゲームである。移動する際は主に西瓜を保持しながら水中を潜行し、敵陣の筏近くまで運搬する。西瓜は浮力があるので、それを沈めながら潜ることはかなり難しかったと思われるが、それがかえて面白かったのだろう。水面近くでの奪い合いも激しく、西瓜を保持する者、それを防御する者、そして相手に攻撃をしかけ西瓜を奪う者などの役割分担がされていたようである。この「西瓜取り」をボールに置き換えれば、まさに英国の「初期ウォーター・ Polo」と非常に類似したゲームであったと言える。

このように「打球戯」や「西瓜取り」は、1899(明治32)年頃から既に水術訓練の一環として盛んに行われており、そのルールはウォーター・ Poloと類似していた。特に「打球戯」は、「騎馬打毬」を水中で行ったものであり、「騎馬打毬」が英国の「Polo」と同様と考えれば、まさに「打球戯」は和製のウォーター・ Poloであり、英国発祥のウォーター・ Poloが日本に導入される前に、既に我国特有のウォーター・ Poloが、嘉納治五郎のもとで行われていたのであった。



球 打

図0 打球戯のようす(造士会, 1901)

### 3. 日本へのウォーター・ポロの伝播と普及

これまでに明らかにされている資料の中では、日本で最初にウォーター・ポロを行ったのは、旧制第一高等学校(一高)とされてきた<sup>3)</sup>。その資料によれば、「明治四十年七月十三日水泳場開場、塩谷、谷山両先生の来場あり。(中略)此の月二十八日、我部初めてウォーター・ポロの遊戯を行う。」と記されている。しかし東京高師の校友会誌には、水泳部の活動記録の中に「(明治40年)七月二十三日、晴、今日は大会の日なり、委員共は之が準備に忙殺せられぬ、幸にして風なく浪到って穏やかなり、午後二時会は空砲三発以て始められる。その順序を示せば、一、式泳、(中略)六、ウォーター・ポロ」<sup>13)</sup>との記述が見つかった。この記述に基づけば、東京高師水泳部(7月23日)の方が、一高(7月28日)より5日早くウォーター・ポロを行っていた事になる。さらに同年の8月5日には、館山(千葉県)北条海岸において第二回関東総合水泳大会が開催され、東京高師付属中学、開成中学、早稲田中学、川越中学、一高、外国語学校および東京高師の7校が一堂に会して水泳の技を競い合った。その大会においては、各種競泳や模範泳法が実施された他、遊戯として西瓜取りやウォーター・ポロが行われたことが記録されている<sup>14)</sup>。大会の様子を記した記事によれば「遊戯はとりどりに面白く、勇壮なる西瓜取、(中略)活発なるウォーター・ポロなど、演者も観者も興じて時の移るを知らず」とある。これら明治40年におけるウォーター・ポロの実施に関する日付を整理すると、第二回関東連合水泳大会(8月5日)においてウォーター・ポロの試合を行うために、東京高師と一高が試合に先立って、それぞれウォーター・ポロの練習(東京高師：7月23日、一高：7月28日)を行ったものと推察される。つまり日本においては、第二回関東連合水泳大会において、一高と東京高師との間で公式試合が行われた1907(明治40)年がウォーター・ポロ幕明けの年と言える。ウォーター・ポロの試合が初めて行われた時期を西洋諸国と比較すると、米国(1888年)、ドイツ(1894年)、ベルギー(1895年)、オーストリア(1896年)、フランス(1898年)、ハンガリー(1899年)、イタリア(1900年)などの国よりは遅いが、スウェーデン(1906年)やスペイン(1908年)とほぼ同時期あり、比較的早い段階で日本にもウォーター・ポロが伝播していたことが

分る。しかしながら、誰がどのような経緯でウォーター・ポロを両校に導入したかは、不明である。1907(明治40)年以降も東京高師水泳部は、毎年関東連合水泳大会<sup>15)</sup>や部内の水泳大会<sup>16)・19)</sup>においてウォーター・ポロの試合を行っており、一高と共に日本ウォーター・ポロの草創期をリードしていたと言え、関東連合水泳大会は第8回(1913年)まで開催された。

なお、ウォーター・ポロが初めて行われた1907(明治40)年の東京高師での水泳大会では、ウォーター・ポロとは別に打球戯も行われていた。つまり、打球戯とウォーター・ポロとを区別して行われていたことになる。翌年以降は、打球戯は行われなくなるので、ウォーター・ポロへと移行して行ったと考えられる。つまり東京高師においては、打球戯を受け皿としてウォーター・ポロへと移行したと言え、これは東京高師固有のウォーター・ポロの受容といえる。

東京高師や一高の以外では、1910(明治43)年に慶応義塾のティルソン・ウィード(Tilson Weed)教授がウォーター・ポロを慶応義塾生に紹介したとされる<sup>20)</sup>。その後1915(大正4)年には慶応義塾水泳部内にウォーター・ポロ・チームが結成され、同年8月15日には、神奈川県葉山海岸の会場に特設されたフィールドで横浜外人クラブ<sup>注7)</sup>と試合を行った。結果は、9対0の大差で慶応義塾が負けたが、これが日本国内で記録に残っている最初の国際試合となった。この試合を実行するに当たり、慶応義塾の学生がルールブックの翻訳を試みたが、実際の競技経験がない種目であったので、ホッケーやサッカーの規則を参考に苦心して和文の競技規則を作成したとされる<sup>5)</sup>。この第1回の横浜外人クラブとの交流試合を皮切りに、慶応義塾は1923(大正12)年までほぼ毎年のように交流試合を重ねて実力を付け、1923年8月12日に開催された横浜外人クラブとの第9回戦で初めて勝利を上げるに到った。

関西地区においては、1906(明治39)年に大阪毎日新聞社が開設した浜寺水練学校<sup>21)</sup>において、神戸に居留していた神戸漕艇クラブ(Kobe Regatta & Athletic Club)のメンバーが1911(明治44)年頃ウォーター・ポロを指導したとされ<sup>3)</sup>、以後浜寺水練学校と神戸外人との間でウォーター・ポロを通じた交流が行われていたようである<sup>22)</sup>。そして神戸在住で外国商人のレオナルド・ジェームス

(Leonard G. James)が、日本にウォーター・ Polo をもっと普及させようと1920 (大正9)年に日英対照版の『ウォーター・ Polo 競技規則』<sup>23)</sup>を大阪毎日新聞社運動部の協力を得て刊行し、それを全国の学校に配布して、ウォーター・ Polo の普及に尽力した。この競技規則は日英対照となっているので、英文表記のルールと同年代に英国で用いられていたルールの比較を試みると、1912年にアマチュア水泳連盟 (Amateur Swimming Association) から発行された公式ルールブック<sup>24)</sup>における条文とはかなり異なっていた。一方、1918年に発刊された水泳指導書の巻末に掲載されている英国ルール<sup>25)</sup>と比較すると、細部ではやや異なる点が見受けられたが、大筋ではほぼ同一の条文と判断される。よって1920年に発行された『ウォーター・ Polo 競技規則』は、1913年～1918年の間に英国で用いられていたルールが元になっているものと思われる。いずれにせよこのルールブックは、黎明期の日本にとって、ウォーター・ Polo (水球) を普及させるための大切な礎となった。

このように関東および関西において、ウィード教授やジェームズ氏の尽力により、少しずつ日本におけるウォーター・ Polo の認知度は高まっていったと思われるが、それでも1925 (大正14)年に発行された水泳指導書<sup>26)</sup>によれば、「水球 (Water Polo) は今後発達させる必要がある国際的競技であって、国際オリンピック競技会に於ても行はれて居り、非常に苦しいが又面白い事も非常だと云う事であるが、日本ではまだ充分の発達を見て居ない。」との記述があり、普及に関して充分であったとはいえない状況がうかがえる。

#### 4. 競技団体の発足とウォーター・ Polo (水球) 全国大会の開催

日本において、競技スポーツを統括する団体として最初に設立されたのが、大日本体育協会 (日体協) である。日体協は、第5回ストックホルム・オリンピック大会に日本選手を派遣するための母体として、1911 (明治44)年7月に嘉納治五郎を初代会長として創立された<sup>27)</sup>。当時、日体協は多くのスポーツ競技に関する全国大会の運営等を統括しており、1914 (大正3)年には日体協主催で第1回水上大会が大森 (東京) で開催された。しかし初回とあって競技種目は自由形100m、200m、800mと400mリレーのみで、ウォーター・ Polo は

行われず、参加選手も百人に満たなかった。しかしながら、この全国水泳大会は回を重ねるごとに参加選手も増加し、日本一のスイマーを決するための重要な大会へと発展して行った。その後も日体協の主導で、全国大会やオリンピックあるいは極東大会の予選会が開催され、事実上日体協の水泳部会が日本水泳界を牛耳っていた事になる。

この日体協水泳部会の独善的な運営に対して不満を抱く学生スイマーが中心となり、萬朝報新聞社<sup>28)</sup>の後援を得て1921 (大正10)年9月10、11日に三笠園池 (生麦) で全国各大学対抗競泳大会が開催された。この大会を契機として、学生による水泳競技統括団体の設立に関する機運が高まり、1923 (大正12)年9月に「全国学生水上競技連盟」が発足した。発足当時の学生連盟の規約の中には、「中等学校水上競技会、女子水上競技会を開催することあるべし」<sup>28)</sup>と記述されており、広く日本の水泳界の発展に資することを目的としている事が分かる。年代的には、この頃既に東京高師や一高あるいは慶応義塾などはウォーター・ Polo を行っていたわけだが、全国規模でウォーター・ Polo の試合が行われることはなかった。

全国学生水上競技連盟発足の流れを受け、さらに日体協の組織改革と時期を同じくして、日本における水泳の全国統括機関を設立しようという動きが活発となり、1924 (大正13)年10月31日に「大日本水上競技連盟」が創立された。そして翌年の1925 (大正14)年には、大日本水上競技連盟の主催で10月10～12日の3日間に渡り「全日本選手権水上競技会」が開催され、ウォーター・ Polo 競技も実施された。本大会には、慶応義塾 (関東代表)、東京ウォーター・ Polo 倶楽部 (東海代表)、帝国水友会 (近畿代表) の3つのチームが出場し、玉川プールで行われた。10月中旬とあって水温が低く、過酷な条件での試合となったが、寒さによく耐えた東京ウォーター・ Polo 倶楽部が優勝し、次いで慶応義塾、帝国水友会の順となった。この大会は、第二回明治神宮競技大会<sup>29)</sup>を兼ねて開催され、公正な競技運営をするための規則として、競泳、飛込、ウォーター・ Polo、それぞれの競技規則が整備された。ウォーター・ Polo 競技に関しては、この時制定された『明治神宮競技大会水上競技大会規程』<sup>29)</sup>が日本で初めての公式競技規則となった。

この規定ができる以前は、慶応義塾の学生に

よって翻訳されたルールやジェームズ氏による『ウオター、ポーロ競技規則』が非公式に用いられていたと考えられる。『明治神宮競技大会水上競技大会規程』は前文で「国際アマター水上競技連盟に加盟せる総ての国に於ける国内又は国際競技は本規則に拠るべきものなり。」と記しており、「大日本水上競技連盟」としては、国際水泳連盟(FINA)に加盟していなかったもの(後の1928(昭和3)年に加盟)国際ルールに則った本格的な競技会にしようとする意図が感じられる。

### 5. 初期ウオター・ポーロ競技規則の変化

1920(大正9)年に刊行された『ウオター、ポーロ競技規則』(以後「旧規則」とする)と1925(大正14)年に制定された『明治神宮競技大会水上競技大会規程』(以後「新規程」とする)を比較するといくつかの違いが認められた。項目ごとに相違点をまとめると次のような変化があった。

#### 5.1 施設及び用具

実際の施設や用具のサイズはほぼ同一であるが、長さの基準となる単位が異なり「旧規則」ではヤード、フィート、インチであったのが、「新規程」では総てメートルに統一された。また帽子の色に関しては、「旧規則」では暗青色と赤色と規定されていたが、「新規程」では藍色と白色に変更され、赤色はゴールキーパーが着用する事になった。またハーフラインおよび1.83mライン地点にも印を置くことになった。

#### 5.2 競技進行

「新規程」では「旧規則」より審判の判定すべき事項が明確化され、ゴールスロー、コーナースロー、得点、反則などの事象が生じた場合には、すべて笛で合図するよう変更された。またゴールサイドを決定する際には、キャプテンが「拳を打つ」ことで決していたのが抽選に変更された。競技開始の合図に関しても「旧規則」では「ゴー」という言葉を発していたのを笛の合図によって開始するように変更された。

#### 5.3 反則

通常反則に関して、「新規程」では次のような反則項目が新たに追加された。<sup>1)</sup>水底を歩くこと、<sup>2)</sup>審判が投げたボールが水面につく前に触れること。<sup>3)</sup>コーナースローの場合にゴールキーパーまたは1.83m以内に居る味方に投球すること、などである。その他、故意反則に関しては、大きな変

更点はなかった。

#### 5.4 各種スロー

フリースローに関して、「新規程」では審判が笛で反則を宣告し、さらにフリースローが与えられるチームの色の旗を挙げるよう定められた。その場合、フリースローは反則の起こった場所に最も近い競技者が行なわなければならない。またフリースローを行う競技者は、手からボールが離れたことが各競技者によく見えるよう行う事が義務付けられた。

コーナースローに関しては、「隅よりの投球」とあったのが、「新規程」では1.83mラインとサイドラインとの交点から行うよう地点が明確化された。

また「旧規則」では「攻撃側がゴールを超えてボールを投げた場合には敵のゴールキーパーにフリースローを与える」と規定されていたが、「新規程」では「敵のゴールラインを超えてボールを投げた時にはゴールキーパーに『ゴールスロー』が与えられる」と新たに『ゴールスロー』が追加され、その際ゴールキーパーは他の競技者か1.83mラインの外に投球しなければならないと定められた。

#### 5.5 ゴールキーパー

「旧規則」では他の競技者と同様にゴールキーパーも握り拳でボールを打つことを禁止されていたが、「新規程」では握り拳を使うことが許可された。またボールを保持している時は他の競技者と同様に扱う事が明示された。

#### 5.6 退水

「新規程」では競技進行中に競技者が審判の許可を得ずに勝手に離水したり、審判の要請にもかかわらず再入水することを拒むことは、重大な違法行為であるとし、場合によってはその後の競技参加が禁止される事が定められた。

#### 5.7 その他

「新規程」ではゴール・スコアラーを新たに配置する事が定められ、赤白の旗を持って得点か否かを判定するようになった。その際、赤旗はコーナースロー、白旗はゴールスロー、赤白両旗は得点とする。またゴール・スコアラーは抽選によって受け持ちを決め、試合中は位置を交替しないとされる。

以上、「旧規則」と「新規程」との相違点をまとめると、ルール改正によって試合の進行を競技者や観客にとってより分かり易くしようとする意図が

うかがえる。たとえば反則、得点あるいは各種スローなどの事象が起こった場合に、審判は必ず笛を鳴らし、フリースローが与えられるチームの色の旗が掲げられるようになった。これによって観客も競技者も的確に状況判断できるようになったと思われる。さらにゴールスコアラーを配置するなど、競技運営がより公正に行われよう配慮されている。さらに審判の権限が強化され、審判の判定に対して不服従の競技者に対しては、以後の試合出場停止処分もありえることを明示し、試合の統制をはかろうとしている。

しかしながら、どちらのルールも英国アマチュア水泳連盟(ASA)や国際水泳連盟(FINA)が定める公式競技規則を忠実に翻訳したものと思われる。よって日本が主体的にルールの見直しを行ったわけではなく、変更されたルールをそのまま輸入したというのが実態である。一方、米国、ドイツあるいはフランスなどの水球先進国においては、各国の実情に合わせて独自の国内ルールが存在し、そのルールに基づいて試合が行われていた<sup>2)</sup>。その点、日本ではウォーター・ポロの導入当初から国際ルールが用いられていた事になり、英国を除く水球先進国とは実情が異なっていた。

## 6. 日本水球の国際化とオリンピック出場

1924(大正13)年に大日本水上競技連盟が設立され、全日本選手権水上競技会が開催されるに至り、国内で水球の雄を決する争いが年毎に激しくなる一方で、日本の実力を高めるためには、国際試合を行う必要も唱えられた。そこで1926(大正15)年9月8日、日本水上競技連盟、報知新聞社が主催し、玉川プール(東京)で日米対抗水上競技大会が行われた際、番外として初の水球の公式国際試合が行われた<sup>30)</sup>。結果は8対0で日本が米国に惨敗するものの、米国選手の美技に観衆は酔い、選手達も水球先進国との差をまざまざと見せ付けられ、さらに訓練をつむ必要性を身をもって感じる機会となった。

1928(昭和3)年には、全日本水上競技連盟が国際水泳連盟(FINA)に加入し、FINAの機構に合わせて、競泳、飛込、水球の3部門が整備され、日本水泳陣が世界に進出する準備が整った。競泳に関しては、既に同年アムステルダムにおいて開催されたオリンピックにおいて鶴田義行選手が200m平泳ぎで優勝するなど、世界から注目される存在となりつつあった。一方水球に関しては、

代表チームを送ることすらできなかったが、アムステルダム・オリンピック直後の1928(昭和3)年10月7日、オリンピックで活躍した選手を日本に招待して開催した国際水上大会のエキジションマッチとして外国混成チームと日本チームとの親善試合が行われた。結果は、ワイズミューラーらスーパースターの活躍により、外国混成チームが8対0で日本チームに圧勝した<sup>30)</sup>。日本チームはゲーム経験の浅さが露呈し、外国人選手に翻弄されればなしであり、ゲーム経験を積む事の大切さを痛感することになる。

そして1930(昭和5)年になると、日本水球は大きな飛躍を遂げる事になる。まずウォーター・ポロの訳語が「水球」とすることが公式に決定され、この年に日本水上競技連盟から『水球競技規定』が発行された。そしてそれまでトーナメント方式で行われていた全日本学生選手権がリーグ戦方式へと変更され、9大学<sup>注10)</sup>が9日間に渡って熱戦を繰り広げ、大いに日本水球のレベル向上に役立った<sup>31)</sup>。結果は、早稲田大学が宿敵慶應義塾大学を押さえ、見事に優勝を飾った。そして1930(昭和5)年10月、新装となった明治神宮プールにて行われた極東競技大会に水球がはじめてエキジションとして採用され、日本の早稲田大学、日本大学、慶應義塾大学、帝国大学に加え中華民国チームが参加した。海外からの参加は中華民国のみであったが、早稲田大学が全日本学生選手権の余勢をかって優勝した。

1931(昭和6)年に入ると、翌年ロスアンゼルスで開催予定のオリンピックに水球も何とか代表チームを送ろうとする動きが活発化する。当初は水球チームの派遣は見送られる予定であったが、全国学生水上競技連盟より「将来多事ならんとする水球競技の為に選手兼視察を目的とする」チーム派遣要請が日本水上競技連盟宛に提出され、議論の末承認され、日本代表チームの派遣が決定した<sup>30)</sup>。

オリンピック開催当年の1932(昭和7)年6月には、オリンピック選考試合が行われ、9名<sup>注11)</sup>の精鋭が選出されて、6月下旬航路にてロスアンゼルスに向けて出航した。この代表チーム派遣に尽力した杉田忠治は感慨を込めて次のように著書に記している。「我国の水球は、永き忍苦の年を経て漸くその緒につき、今や前途に光明を望む光輝ある歴史の第一歩を踏みつつある。」<sup>30)</sup>しかし現実

厳しく、オリンピック大会では5カ国が出場して日本は3試合を行ったが、対米国戦(0-10)、対ハンガリー戦(0-18)、対ドイツ戦(0-10)と惨敗し、意気消沈する。しかしながらキャプテンを務めた藤田明は、敗戦の中からも多くを学び、「日本はどここの国よりも極めてゲーム(特に国際試合)の数が少ない点に絶対的不利を持っている。この悩みを解決する唯一の鍵として私は水球を普及する事を心から主張し、且つ努力する事を誓うものである。」<sup>32)</sup>と報告書に述べている。実際藤田は、後に日本水泳連盟(日本水上競技連盟から改称)の会長となり水球の発展に大いに尽力した。また選手として参加した時任厳は、敗戦を踏まえた今後の方策として「特に日本人に恵まれたスピードと耐水力は鋭き出足の条件によって十二分にこの(体格)ハンディキャップを補い得るだろう。足の速い事が陸上団体競技の第一必要条件である如く泳のスピードと強さはそれのみでも水球に強くなり得る絶対的好条件であらねばならぬ。」<sup>33)</sup>と記し、藤田と共にその後の日本水球界の発展に力を尽くした。

「井の中の蛙」であった日本水球はこのロスアンゼルス・オリンピックでの惨敗を契機に大学生や社会人のみならず高校生などの若年層の強化にも取り組み、水球の底辺拡大とナショナルチームの強化に努め、現在の発展に到る礎を築いたと言える。そういう意味では、ロスアンゼルス・オリンピックでの屈辱が日本水球に大きな転機になったわけである。

## 7. まとめ

日本では古来より、「打毬」の伝統を活かした「打球戯」などの水上遊戯が盛んに行われており、その「打球戯」が英国における初期のウォーター・ポロのルールと類似している事を考え合わせると、英国の「ウォーター・ポロ」が伝来する前から日本には「和製ウォーター・ポロ」が存在していたと言える。また日本では武術のひとつである古式泳法も発達しており、巻足やおおり足などウォーター・ポロに必須の泳技術に関する訓練方法なども整備されていたため、ウォーター・ポロの導入は比較的容易であったと考えられる。

1907(明治40)年には、記録に残る最も古いウォーター・ポロの試合が東京高師と一高との間で行われた。英国をはじめとする水球先進国で

は、水泳(あるいは漕艇)クラブに所属する会員がウォーター・ポロのプレイを楽しんだが、日本では大学生が主な担い手であり、最初は水術訓練の一環として行っていた。これはウォーター・ポロに限らず、他の外国から導入したスポーツ種目においても同様であり、学生によるスポーツ活動がその後の発展に大きく関与している。また英国以外の水球先進国では、各国の実情に合わせてルールが変更されるなど現地化が進んだが、日本では英国におけるルールがそのまま導入され、日本の伝統を活かした改良などは行われなかった。

そして1930(昭和5)年には「ウォーター・ポロ」から「水球」へと競技の名称が改称され、さらにリーグ戦による大学選手権が行われなど日本の水球は第2の幕明けを迎える。その後日本水球は順調に発展を遂げ、現在では日本人選手がスペインやイタリアなど、海外水球強豪国のクラブで活躍するまでになった。しかしながらここに到るまでには、先人達のたゆまぬ努力があったことを忘れてはならないと思われる。

## 注

<sup>注1)</sup> 英国(Great Britain)とは、ブリテン島を構成する3つの地域イングランド、ウェールズ、スコットランドの総称とする。なお、個別に特定の地域を指す場合には、イングランド、スコットランドなどと表記する。

<sup>注2)</sup> ジョン・ロビンソン(John Robinson)は、イングランド生まれで生年月日不詳。プロフェッショナルスイマーとして活動し、1876年にボーンマウス漕艇クラブ(Bournemouth Premier Rowing Club)で行われた水球の試合に参加。1884年からイングランドのランカシャークラブ(Lancashire Club)に所属し、1888年に米国に渡り、1916年までボストンアスレティック協会(Boston Athletic Association)で水球の指導に携わる。

<sup>注3)</sup> フリッツ・クニーゼ(Fritz Kniese)は、ロンドンのクラブで水球をプレイする機会を得て、祖国ドイツのベルリンに帰った時に自分のチームであるボルシア・ベルリン(Borussia-Berlin)に水球を伝えた。

<sup>注4)</sup> フゼーレッシ・アルパード(Füzéressy Árpád)：ハンガリーのベストで弁護士をする傍ら、ハンガリー水泳同好会(MUE)の主要メンバー。



英国の水泳雑誌を講読中に水球の存在を知り、アマチュア水泳協会(ASA)に手紙を書き、水球ルールブックとボールを取り寄せ、自らのクラブに水球を導入した。

注5) 「打毬」には馬に乗って行う「騎馬打毬」と馬に乗らず自ら陸上を駆け巡る「徒打毬」があるが、いずれもルールはほぼ同一である。

注6) 1870年～1880年代後半にかけて、英国ではゴールとして港の棧橋や船を用いる事もあり、その棧橋や船にボールを置いたら得点とするルールで水球を行っていた。

注7) Yokohama Amature Rowing Clubに所属する居留外国人

注8) 萬朝報とは、日本におけるゴシップ報道の先駆者として知られる日刊新聞で、1892年～1940年まで朝報社によって発行されていた。

注9) 明治神宮競技大会は、明治神宮奉賛会が主催し、実質的には内務省衛生局が主管して、明治神宮外苑に建設された競技場で各種スポーツ競技が実施された。この大会が後の国民体育大会へと発展していった。水上競技は、第2回大会から開催種目に加えられ、競泳は芝プール、水球は玉川プールで行われた。

注10) リーグ戦に参加した大学は以下の9大学で、最終順位順に1)早稲田、2)慶応義塾、3)明治、4)帝国、5)日本、6)法政、7)一高、8)立教、9)拓殖であった。

注11) ロスアンゼルス・オリンピック代表選手は以下の9名であった。藤田明(早大)、坂上安太郎(早大)、木村清兵衛(慶大)、沢海東助(慶大)、時任巖(早大)、土井修二(早大)、松本隆重(早大)、村井清(東大)、竹林隆二(早大)

#### 引用文献

- 1) 高木英樹、真田久(2005)：英国における水球(Water Polo)競技の始まりとルールの変遷に関する研究. 筑波大学体育科学系紀要, 28 : 79-90.
- 2) 高木英樹、真田久(2006)：水球(Water Polo)の伝播と各国の受容に関する研究. 筑波大学体育科学系紀要, 29 : 53-65.
- 3) 日本水泳連盟(1969)：水連四十年史. 日本水泳連盟：東京, pp.54.
- 4) 笹島彦次郎(1982)：義塾ウォーターポロ史. 慶應義塾体育会水泳部八十年誌、三田水泳会：

東京, pp.39-51.

- 5) 安達誠(1995)：日本の水球草創期の競技規則に関する研究. 未発表卒業論文, 筑波大学, pp.1-49.
- 6) 造士会(1889)：國士. 12号(明治32年9月5日), pp.34-35.
- 7) 造士会(1901)：國士. 第3巻36号(明治34年9月13日), pp.48-49.
- 8) 東京高等師範学校校友会(1906)：校友会誌付録, 第11号, pp.15.
- 9) 高橋雄治(1919)：大日本游泳術. 水交会：東京, pp.204-208.
- 10) 岩岡豊岡(1979)：打毬のしおり. 長者山新羅神社：八戸, pp.12.
- 11) 宮内省主馬寮(1934)：打毬ノ由来 附打毬規定. 宮内省：東京, pp.1-32.
- 12) 東京高等師範学校校友会(1905)：校友会誌, 第8号, pp.121.
- 13) 東京高等師範学校校友会(1907)：校友会誌, 第14号, pp.116.
- 14) 同掲書, pp.117-118.
- 15) 東京高等師範学校校友会(1909)：校友会誌, 第20号, pp.118.
- 16) 東京高等師範学校校友会(1908)：校友会誌, 第17号, pp.105.
- 17) 東京高等師範学校校友会(1909)：校友会誌, 第20号, pp.114.
- 18) 東京高等師範学校校友会(1910)：校友会誌, 第24号, pp.110.
- 19) 東京高等師範学校校友会(1911)：校友会誌, 第30号, pp.95.
- 20) 伊藤基孝(1993)：塾水球の回顧と展望. 慶應義塾体育会水泳部九十年誌, 三田水泳会：東京, pp.72-73.
- 21) 日本水泳連盟(1969)：水連四十年史. 日本水泳連盟：東京, pp.30.
- 22) 杉田忠治、吉本祐一、安部輝太郎(1933)：水球 ウォーターポロ. 駿南社：東京, pp.6-7.
- 23) レオナルド・ジェームス、大阪毎日新聞社運動部(訳)(1920)：ウオター、ポーロ競技規則. 角丸欧文印刷所：神戸, pp.1-16.
- 24) Hurd, J. C. (1912): Handbook for 1912: containing laws of swimming and rules of water polo, past and present champions, programme for the year, amateur swimming records. Amateur Swimming

- Association : Hanbury.
- 25) Handely, L. B. (1918): *Swimming and watermanship*. Macmillan: New York.
- 26) 梅澤親光(1925) : 水泳. 改造社運動叢書3編, 改造社 : 東京, pp.197 - 198.
- 27) 大日本体育協会(1936) : 大日本体育協会史上巻. 大日本体育協会 : 東京, pp.1-16.
- 28) 日本水泳連盟(1969) : 水連四十年史. 日本水泳連盟 : 東京, pp.32.
- 29) 明治神宮競技大会水上競技大会規程. (1925) : 不記.
- 30) 杉田忠治、吉本祐一、安部輝太郎(1933) : 水球 ウォーターポロ. 駿南社 : 東京, pp.8-17.
- 31) 杉田忠治(1931) : インターカレヂ水球戦に付て. 水泳(日本水上競技連盟), 4 : 28-33.
- 32) 藤田明(1932) : オリンピック水球競技. 水泳(日本水上競技連盟), 14 : 23-25.
- 33) 時任巖(1938) : 水球の初歩的技術と理論に就いて. 水球読本, 日本水上競技連盟 : 東京, pp.32-56.